

石川県白山山麓に迷行したシラオネツタイチョウ

上 馬 康 生 石川県白山自然保護センター

竹 田 伸 一 石川県自然保護課 (石川県野鳥園)

A WHITE-TAILED TROPICBIRD (*PHAETHON LEPTURUS*) OBSERVED IN MT. HAKUSAN AREA AFTER TYPHOON NO.26 (1994)

Yasuo UEUMA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

Shin-ichi TAKEDA, *Division of Nature Conservation of Ishikawa Prefectural Government*

はじめに

ネツタイチョウ類は、熱帯から亜熱帯の海洋で生活する鳥で、わが国ではアカオネツタイチョウが北硫黄島や南鳥島での繁殖が知られているが、シラオネツタイチョウについては繁殖例はなく、小笠原諸島や北硫黄島、南鳥島、沖縄諸島、鳥島付近でまれに見られることがあるくらいで、本州では台風の通過時に、ごく少数が記録されているにすぎない(清棲 1978, 日本鳥学会 1974)。石川県でも、100年以上も前の1890年に記録があるとされるが(清棲 1978)、詳細は不明である。今回、石川県の白山山麓で生体が発見されたので、それについて報告する。

報告にあたり、発見者の石川県白山自然保護センター殊才実氏、海洋鳥に関する落鳥の記録を教えてくださいいただいた中村正博氏、台風26号他の資料を見せていただいた金沢地方気象台にお礼申し上げます。

発見及びその後の状況

シラオネツタイチョウが発見されたのは、1994年9月30日の午前8時頃で、白山山頂の北西約18kmに



シラオネツタイチョウ (1994年10月1日撮影)

あたる石川郡尾口村女原(標高330m)の、尾口村役場近くの国道157号線の道路上である。発見者の殊才実氏によると、道路の端に、両翼を折り畳んだ腹ばいの状態で見つかり、近づくと嘴で威嚇してくるものの、その状態から動くことはなかったという。約5時間後に筆者が見に行ったときも、まだ同じ場所で動かずにいた。外傷はなかったが、飛び立つことはできなかったため、体力を消耗して動けなくなったものと考え、石川県野鳥園に収容した。収容時にすぐに、小アジを3尾食べ、その後も毎日7~8尾(合計60~70g)を与えると食べていたが、4日目から食べなくなり、しだいに衰弱して9日目の10月9日に死亡した。

体色及び計測値

体色は、全体的には白色で、目先及び目の後方が黒色で、頭部及び背、肩は黒斑が混じり、初列風切の一部や中雨覆は黒色であった。また嘴は灰色部分があるが、全体的には黄色味をおびていた。中央尾羽は成長途上で、右側がより短かった。体色の状況及び中央尾羽は2年目から長くなるとされる(黒田 1972)ことから、シラオネツタイチョウの若鳥と判断された。

収容時の体重は270g、全長465mm、翼開長800mmであった。また死亡時の体重は192gで、死亡後の計測によると、翼長230mm、尾長220mm、嘴峰44.3mm、跗蹠21.8mmであった。

台風との関係

台風の通過後に、海洋上で生活する南方系の鳥が見つかることはよくあることで、時には大群が飛来しているのが観察されている(澤田 1983, 金田・

表 台風通過後に石川県内、他で落下した海洋鳥と台風の勢力

種	類	発見年月日*	発見場所	台風	最低気圧	最大風速	最接近日	気圧
(1)	シロハラミズナギドリ	1982. 9. 1	金沢市七ツ屋町	13号	915hpa	50m/s	8.27午後	970~980
(2)	シロハラミズナギドリ	1984. 8. 23	松任市千代野	10号	960	35	8.22午前	約980
(3)	シロハラミズナギドリ	1985. 9. 4	石川郡野々市町	12号	955	40	9.1午後	約990
(4)	シロハラミズナギドリ	1989. 8. 30	金沢市額	17号	975	30	8.27午後	約980
(5)	シロハラミズナギドリ	1990. 8. 25	金沢市二口町	14号	960	40	8.22午後	980~990
(6)	シラオネツタイチョウ	1994. 9. 30	石川郡尾口村	26号	925	50	9.30午前	980
(7)	ハジロクロハラアジサシ他	1982. 9. 25	高知県宿毛市	19号	940	45	9.25午前	978.1
(8)	ヒメシロハラミズナギドリ他	1989. 8. 6	千葉県銚子市	13号	950	40	8.6午後	975.7

* (1)~(5)については、石川県野鳥園に収容された日であり、発見はその日以前である。

他 1989)。石川県でも、日時と場所がはっきりしているもので、1982年~1994年の間に保護されて野鳥園に生きた個体が収容された記録が、表のとおり6例ある。今回のシラオネツタイチョウを除くと、いずれもシロハラミズナギドリで、表に記したように台風の通過後であることが分かっている。この他に、南方系の海洋鳥でシロアジサシ（1973年11月13日、河北郡内灘町、中村正博・高野伸二観察）、オオアジサシ（1980年 8月24日、中川富男撮影）の記録があるが、該当する台風は不明であり、鳥は正常に飛行しているのが観察されていることから、これらは台風と直接関係がないものと考えられる。

今回は、シラオネツタイチョウが見つかった日の未明に、台風が石川県付近を通過している。金沢地方気象台の資料をもとに、その台風26号の発生からの位置を示すと図の(6)のようになる。シラオネツタイチョウは、この通過コース付近の海上周辺から台風巻き込まれたと考えられる。台風の中心部の構造を考えるなら、中心へ向かう強い風に吹き寄せられ、おそらく中心部の台風眼に入ったまま、数日間えさを食べることなく運ばれてきたものと推定される。なお、図で円で囲んだ島は、シラオネツタイチョウの分布するとされているところである（清棲1978）。

このように南方系の海洋鳥が、台風運ばれてきて日本本土に達するとすれば、その鳥が生息していた場所で巻き込まれる時の台風の勢力や、通過コース、鳥が台風から離れて自由になるときの台風の勢力等が関係してくると考えられる。そこで、これらについて次に記す。なお中心気圧等の数値は、ことわりのない限り日本気象協会（1983、他）による。

今回の例では、9月17日にフィリピン東方海上で発生した熱帯低気圧が、19日にグアム島南西海上で台風となっている。台風は、沖ノ鳥島南東方にあっ

た23日21時から、紀伊半島に上陸後の29日21時までの間、中心気圧960ヘクトパスカル (hpa) 以上、最大風速40~50m/sの強い勢力を保っていた。なかでも24日15時の沖ノ鳥島付近から、28日6時の南大東島北東方に至る間は、中心気圧930~925hpa、最大風速50m/sの大型で非常に強い勢力となっており、暴風半径は280kmであった。上陸後は台風は勢力を落とし、シラオネツタイチョウの見つかった場所に近い、石川県の西方海上を通過している30日の午前2~3時には980hpaになっている。その後、日本海を北上して30日午後3時には北海道渡島半島西方で温帯低気圧になっている（金沢地方気象台の資料による）。

次に1982年9月25日に愛媛県宇和島付近に上陸して、クロハラアジサシの大群などを運んでいる台風19号は、最盛期940hpaで、海鳥の群れが観察された宿毛市付近を通過した頃は978.1hpaの勢力である（澤田 1983）。また1989年8月6日に千葉県銚子市付近に上陸して、利根川河口にヒメシロハラミズナギドリの大群などを運んでいる台風13号は（金田・他 1989）、最盛期950hpa、上陸時975.7hpaである。

また石川県内でシロハラミズナギドリが見つかったときの5例の台風についてみると、1989年台風17号が最盛期975hpa、石川県通過時は8月27日午前で約980hpaである。他の4例は陸上を通らず、いずれもはるか沖の日本海を通過している(図)。1982年台風13号は、最盛期915hpa、石川県接近は8月27日午後で970~980hpaである。また1984年台風10号は、最盛期960hpa、石川県接近は8月22日午前で約980hpa、1985年台風12号は、最盛期955hpa、石川県接近は9月1日午後で約990hpa、1990年の台風14号は、最盛期960hpa、石川県接近は8月22日午後で980~990hpaである。ただし、この5例の石川県接近時の中心気圧は、文献の記載からの推定値である。

これら台風は、海洋鳥を巻き込んだと考えられる

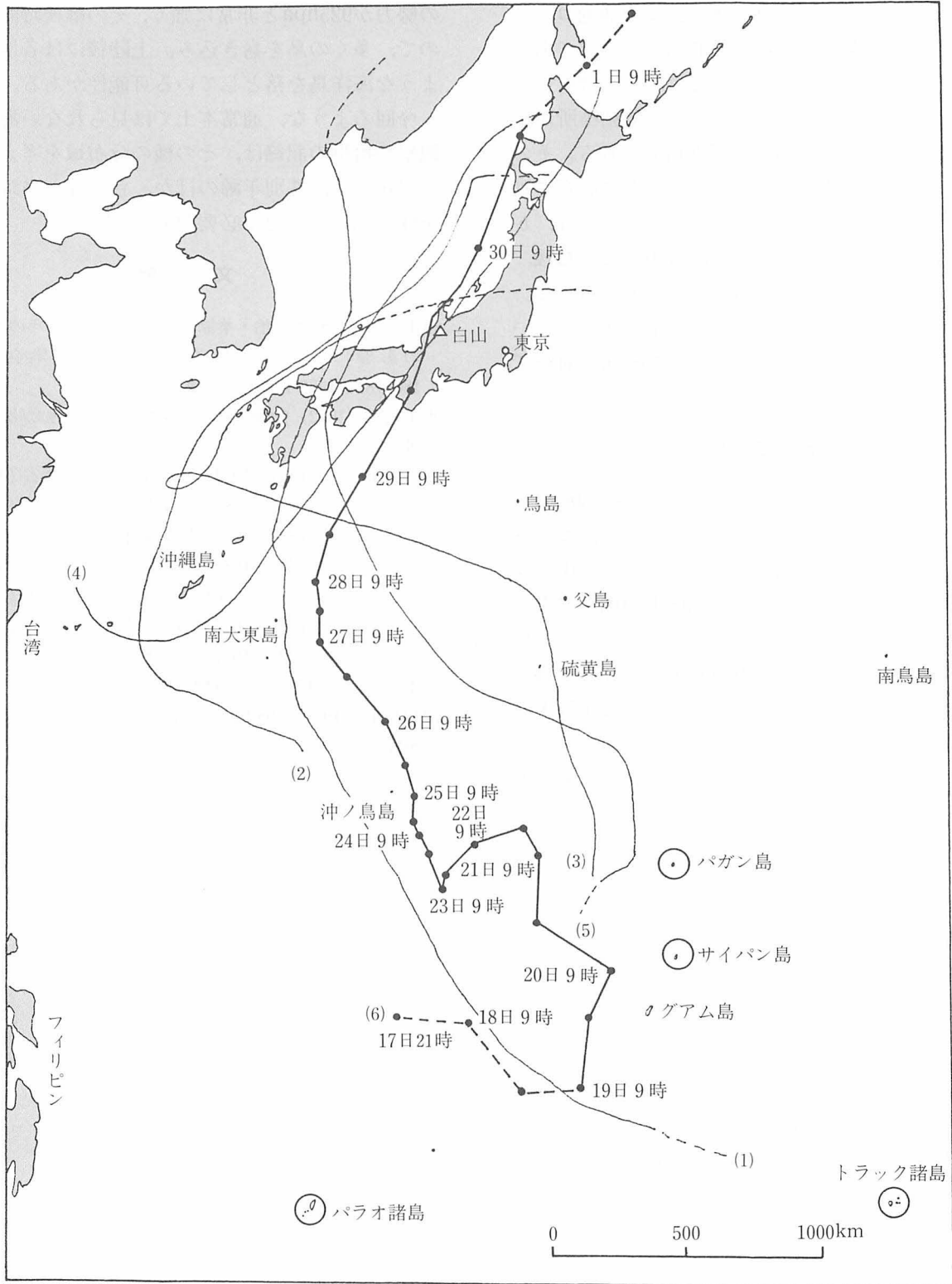


図 石川県に落鳥をもたらした台風の通過コース (1982年~1994年)

実線が台風、破線は熱帯低気圧または温带低気圧、番号は表の番号に対応する。

○はシラオネツタイチョウの分布するとされる島

南方海上では、975hpaの一例を除くと全て960hpa以下の強い台風である。また文献によると、ほとんどが気圧1000hpaの等圧線の半径が300~599kmまたはそれを超える、大型または超大型に分類される大き

な台風であった。つまり、強風域が非常に広い台風であり、進行コース周辺にとどまらず、かなり広い範囲の鳥が影響されていると考えられる。次に鳥が台風の影響から離れて自由になったと考えられる時

の台風の勢力は、鳥の発見場所が台風の通過コースの近くであり、発見時が台風の通過のすぐ後であることが分かっている(6), (7), (8)の3例では976~980hpaとなっている。また鳥の発見場所が台風の通過コースである(4)は約980hpaである。その他の例は、台風の通過後の1~5日の間に収容されているが、発見場所が台風の通過コースからは、かなり離れている。おそらく、鳥は自由になった後、発見場所まで飛行してきて落下したと考えられる。そこで仮に、台風が鳥の発見場所に最も接近していた頃の勢力でみると、前記のように980hpa前後であった。

ま と め

以上のことから、台風は中心気圧が概ね960hpa以下の強くて大きい時に鳥を巻き込みやすく、また巻き込まれていた鳥が台風の影響から離れて自由になるのは、勢力が落ちて中心気圧が980hpa前後になった時であると考えられる。今回の台風26号は、紀伊半島上陸後もしばらく気圧960hpaと勢力を維持しており、シラオネツタイチョウを伴ったまま陸上を進み、勢力が弱まった石川県付近で鳥を落としたものと考えられる。前記のように、この台風は最盛期

の勢力が925hpaと非常に強く、その継続時間も長いので、多くの鳥を巻き込み、上陸後には各地に同じような海洋鳥を落としている可能性がある。

今回のような、通常本土では見られない海洋鳥の観察や拾得の記録は、その種の分布域を考える上でも興味深く、性別年齢のほか、台風など当時の気象条件も記録しておく必要があるだろう。

文 献

- 金田彦太郎・鈴木恒治・桑原和之 (1990) 1989年の台風13号の影響による海鳥類の迷行. 日本鳥学会誌, 38, 180-181. 1989年度大会講演要旨.
- 黒田長久 (1972) 動物系統分類学10 (上) 脊椎動物III. 中山書店.
- 日本気象協会 (1974) 1974年版気象年鑑. 大蔵省印刷局.
- (1981) 1981年版気象年鑑. 大蔵省印刷局.
- (1983) 1983年版気象年鑑. 大蔵省印刷局.
- (1985) 1985年版気象年鑑. 大蔵省印刷局.
- (1986) 1986年版気象年鑑. 大蔵省印刷局.
- (1990) 1990年版気象年鑑. 大蔵省印刷局.
- (1991) 1991年版気象年鑑. 大蔵省印刷局.
- 日本鳥学会 (1974) 日本鳥類目録.
- 澤田佳長 (1983) 1982年の台風19号により迷行した野鳥. Strix, 2, 108-110.